目次

文化財は守れるのか？――「阪神・淡路大震災の検証」

本書では、地震名を「兵庫県南部地震」、震災名を「阪神・淡路大震災」としています。

はじめに……田辺三郎助……3
阪神・淡路大震災文化財救済関連年表……7
年表・本文に登場する所在地図……12

1

シリーズセミナー『文化財の防災を考える』第一回
阪神・淡路大震災の教訓――われわれはどう行動したか
基調報告
被災状況と文化財救出活動……内田　俊秀……14
避難所になった美術館……枝松　亜子……20
組織として活動するためには……辻川　敦……22
パネルディスカッション
阪神・淡路大震災の教訓……28
（コーディネーター）村上　隆
（パネリスト）内田　俊秀・枝松　亜子・辻川　敦
被災者と支援者の意識疎通を　救援時期と受け入れ体制　何をどう救うか
救出文化財のその後　求められる応急処置とは　地域に根ざしたネットワークの構築を

2

シリーズセミナー『文化財の防災を考える』第二回
文化財の防災対策
基調報告
神戸市内の歴史的建造物の復興状況……佐藤　定義……44
「地震先進県」静岡の地震対策……立花　義彰……49
設備を生かすための人的訓練を……中山喜一朗……54
都市景観を生かした文化財保存を……藤原　恵洋……56

パネルディスカッション
文化財の防災対策……58
（コーディネーター）村上　隆
（パネリスト）佐藤　定義・立花　義彰・中山喜一朗・藤原　恵洋・内田　俊秀・神庭　信幸
第一回セミナーを振り返る　文化財の多様性と対応　都市景観と文化財
美術館・博物館における防災対策の実情　二次災害からいかに守るか

3

シリーズセミナー『文化財の防災を考える③』第三回
多様な災害に備えて
基調報告
展示法がもたらした損傷と予想外の災害……森田　恒之……74
中山岩太の写真資料救出……河崎　晃一……76
文化財と消防とのかかわり……小林　茂昭……78
視野を広げて防災を考える……小川雄二郎……80
パネルディスカッション
多様な災害に備えて……82
（コーディネーター）村上　隆
（パネリスト）森田　恒之・河崎　晃一・小林　茂昭・小川雄二郎・神庭　信幸・西山　要一
文化財とは、民俗資料とは　あらゆる変化に対応できる日常活動を
反省と今後やるべきこと

4

シリーズセミナー『文化財の防災を考える④』第四回
被災文化財のアフターケア
基調報告
目的別の人的ネットワークづくりを目指す……牧野　隆夫……94
「もの、場所、人」情報の重要性……森田　稔……96
現代に生きる文化財の保存と修復……中村　康……100
ナショナルトラストと文化財の保護……神庭　信幸……104
パネルディスカッション
被災文化財のアフターケア……106
（コーディネーター）村上　隆
（パネリスト）牧野　隆夫・森田　稔・中村　康・神庭　信幸・増田　勝彦・松田　隆嗣

指定文化財一三〇〇点の保存状態はさまざま　文化財とは何か、守りたいものは何か
ほんの少しの環境改善・通気管理がたいせつ　文化財情報の収集と自己申告制
経済効率との関係で何をどう残すか　日常の努力と連携が生きるネットワークづくり

座談会

文化財のあり方・守り方―阪神・淡路大震災を契機に考える……124
（コーディネーター）村上　隆
（パネリスト）青木　繁夫・内田　俊秀・貝塚　健・三浦　定俊・森田　稔
震災後の復興状況とボランティアの動き　レスキュー体制組織化の必要条件
文化財保存修復学会なりのマニュアルとは　学会としてのPR活動を
文化財・文化を後世に残すためのアピールを　文化財とは何か

付記
神戸通信……140
文化財（美術工芸品等）の防災に関する手引……148
美術工芸品等の防災に関する調査研究……164
神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例……167
協力者一覧……178
あとがき……179

COLUMN CONTENTS

4年後にみえてきたもの

①阪神・淡路大震災と文化財等の緊急救援活動　坂本　勇　18
②歴史資料保全情報ネットワークのその後　辻川　敦　26
③教訓の風化は避けられない　尾立　和則　30
④震災に遭遇して―今後の課題と個人的反省　高橋　利明　35
⑤民俗資料の運命　伊達　仁美　39
⑥古き大先達の知恵　西川杏太郎　52
⑦免震装置の普及がもたらすもの　神庭　信幸　63
⑧その後の「十五番館」　村上　裕道　69
⑨残せるか?激震地の被災ビル　森田　恒之　84
⑩風化する震災体験　増田　勝彦　87
⑪ひとりでにNGO―仏像の私的レスキュー　山崎　隆之　98
⑫文化財防災資料センター　勝盛　典子　103
⑬文部省科学研究費補助金による研究報告書から　三浦　定俊　116
⑭文化財行政と防災　三輪　嘉六　120
⑮阪神・淡路大震災以後のある事例―全国美術館会議の場合　貝塚　健　128
⑯阪神・淡路大震災に思う　青木　繁夫　133

基調報告

被災状況と文化財救出活動

京都造形芸術大学　内田　俊秀

私は、何を目的に、どのように行動したかを、反省を含めて紹介することにします。

一月一七日、神戸市東灘区の魚崎の自宅で寝ており、震度7の激しい揺れを体感しました。最初、近くの高校に避難し、それから大阪に移りました。三、四日して家族が落ち着いてから、やっと文化財がどうなっているか考える余裕ができたというのが実情です。

最初に行動したことは、震災から一〇日ほどのちに、神戸市内の美術館・博物館を自転車で一時間ほどかけてみにいったことです。神戸市立博物館に着いたとき、学芸員も二、三人出勤されていて、地下にたまった水をポンプで排水していました。とても博物館を開くような状況ではありませんでした。早い場所では倒壊した高速道路の解体が始まっていましたが、付近の神社なども壊れており、神戸全域がやられたのではないかという感じをうけたものです。

実際に調査で街を歩いた際、真っ先に目にはいってきたのは建物の被害です。市内には九棟の国指定重要文化財がありますが、六棟が被災しました。被害は、調査にあたった文化庁建造物課の亀井伸雄さんによると、明治時代の洋風建築で、煉瓦積みの煙突が建物の上に倒壊し、屋根から内部にかけて損壊したものが多数みうけられたそうです。これらは、幸い修理後も指定が継続されることになりましたが、兵庫県指定文化財の建造物二棟のように、被害が大きすぎ、再利用可能な部材が不足しているため指定が解除されたものもあります。これは木造二階建て瓦葺きの大きな建物でした。

1985年頃の菊正宗酒造記念館

美術工芸品については、ほとんどが博物館や美術館内部に保管されているので、建造物と比較すると、被害は多くありませんでした。しかし、転倒し破損した石像品の例も報告されています。また、兵庫県東部の川西市栄根寺では、木造の仏像本体には異常がほとんど観察されなかったものの、安置された御堂が倒壊寸前になり、ほかの場所へ全点移動されました。このような例もあります。

全壊した菊正宗酒造記念館（1995年2月）

とり壊された菊正宗酒造記念館（1995年5月）

埋蔵文化財は地下に埋まっているため、被害の状況については不明な点が多くあります。しかし、地震による直接的な被害よりもむしろ、遺跡の上に載っている倒壊建物の撤去と、これに続く新たな建物の建設工事などにより、二次的に発生する発掘調査の問題のほうが、遺跡の保存・活用の問題も加わり、より深刻だと思います。